





# 裸足で八回の四国遍路

## 紀州が育んだ

### 臨濟宗妙心寺派元管長

## 山本玄峰師



遷化前年の写真

亡き父がご親交頂いた現在の本多家菩提、臨濟宗耕月寺住職 川崎宗隆師から山本玄峰著「無門閑提唱」を「惠贈頂き拝読、はじめて山本玄峰師の偉大さに気付いたのが事業の失敗が縁で歩き遍路から帰宅した時でした。

「回想 山本玄峰」玉置辨吉著に同郷の和歌山県東牟婁郡湯の峰出身の玉置氏が庵に玄峰師を訪ねた時の印象を次のように語っています。『老師は縁側で新聞を読んでおられたが、加担の雲水とも思われたか、ちらと顔を見ただけで、何も言われなかつた。わしもお姿を拝んだだけで、何も言わなかつた。



郷里湯の峰に建つ玄峰塔

しかし、わたしはその時、「なんと立派なお相だな」と思った。その印象が今も忘れられない。わたしの師匠精拙老漢(せいせつろうかん)もそうであったが、禅宗の老師なんてものは、色の黒い、眼玉のギョロとした、口の大きい鼻のあぐらをかいた、雲助か山賊のような面魂をしたものばかり思っておつた。ところが、縁側でしずかに新聞を読んでもおられるこの老師は、何と色の白く上品な柔和な円満な御相をしておられることかと感銘したのである。その禅僧というよりは、真言か天台の大長老といった感じであつた。・・・と紹介されている。

さて、私は徒歩巡拝一度、バイクで3回、巡拝団の引率で2度の経験ですが、ここでご紹介させて頂く山本玄峰師は慶応二年正月生まれ壮絶な人生体験、終戦時臨濟宗妙心寺派管長を最後の勤めとし、療養生活、五月末から断食生活に入り、六月三日夜半待者に「旅に出る、法衣の支度をしてくれ」の一語を残して、遂に九十七歳で遷化されました。

老師のお母さんが妊娠を知らずに再婚されたので、老師は不要の子として生まれました。それで、人権思想薄い僻地であり、生まれるとすぐ首をねじられたのだという。しかし死なない。こんどはたらいで半日ぶせておいたが、死なない。

いかに不思議に強い子であつた。私たちも、これは神仏の召使いであろうとあきらめ、それからは大切に育てられた。

渡瀬の岡本家に貰われ育てられた。湯の峯は山また山の奥地である。老師の少年時代は、明治初年のころでも知らないまま成長して、十六歳まで筏流などをされたそうです。

十七歳の時大病して、その後眼病にかかり、失明近い状態になった。京都、大阪の名医をたずね、ある病院では四年半も入院して治療につとめたが直らない。この上はもう弘法大師におすがりして治していただくより他に方法がないと決心して、裸足で七回、四国霊場八十八ヶ所を巡拝する願いをかけた遍路に出発された。

百十年前の遍路である。晴雨にかかわらず、歩き通して一回巡拝するのに、四十五日から五十日かかったそうです。その頃遍路の宿料は一銭五厘から二銭位、道後温泉で五厘位だったそうです。わらじは一銭に四足くれたところもあり、たいてい五厘であつた。お接待にお米を貰うとそれを売って、納経料や宿賃にあてた。当時は遍路にお接待(ものを施すこと)することが盛んで、その地方の人々ばかりでなく、特に紀州からなどは大がかりな接待団体が来て、散髪や米、麦餅、おかず、菓子、ちり紙、わらじ、草履等たくさんくれる。現在でも歩き遍路に、当地の人々による接待風習があります。

### 肉眼も心眼もともに開ける

老師は巡拝七回目のとき、三十三番雪深寺(せつけいじ)のそばに来て病気になるまで倒れた。やむを得ず雪深寺の通夜堂(遍路の無料宿)に泊めてもらい観音菩薩に祈願をこめるところに、ほとんど絶望視されていた視力が出てきた。老師はある日当時の雪深寺の住職太玄和尚に会い、お礼をのべて、「なおこの上遍路を続けられ、この眼は全治するでしょうか」とたずねた。太玄和尚は、「それは治る。しかし肉眼で見ることがもさることながら、心眼を開くことが、もっとも大切だ。心眼を開けば、宇宙全体がわかるようになる」といわれた。

老師は大いに感じるものがあり、お礼の裸足巡拝をさらに一回(都合八回)行い、太玄和尚の弟子になり、得度をされることになった。老師の修行は、同参の人を驚かせるほど

きびしかったが、心眼を開いたのは、雪深寺であつた。

老師は遍路をしているとき、よく道を間違えられたそうですが、人はからかつて、「五回もきていて、道をまちがえるのか」というと老師は「わしは、道を覚えに来ちよらせん」と答えられたそうです。眼が見えるようになったが、文字を覚えなければならぬので、他の修行僧に比べて数倍する努力がいった。僧堂生活はきびしく、時間外に燈火をつけることが許されないから、夜中に本堂の縁の下には入ったり、古俵を山に持って行ってそれにのりまったりして、線香を三本ぐらい束ねて火をつけ、その光で辞書の一字ずつを照らして、飲み込むようにして覚え、一字を覚えると、その一字を破り捨てるようにして勉強されたという。

老師は太玄和尚について雪深寺住職となられたが、さらに悟後の修行を続けられ、後に白隠の道場、松蔭寺や龍澤寺を再興され、花園大学長や、臨濟宗派妙心寺管長となられました。老師は四国遍路をされること前後十三回、八十八歳のときも、霊場ごとく巡拝されました。

### 玄峰師言行録

老師は大変お酒が好きであつたそうですが、小生の亡父(舜二)も酒が好きで玄峰師の書をよく読んでいて赤線を引いている、そこに「老師は禅僧の話に、いきなり酒がとびだすのは、不謹慎きわまりないようですが、とにかく、好きなだけでなく、飲みっぷりの良さにかけても絶品であつた。猪口など差し出して、「こんなもん、ジャマクさい。これについてくれ」と、湯飲み使つてグイグイやった。日銀の法皇、一万田尚登氏も老師の茶碗酒の豪傑、初対面に驚いた一人。

一万田さんがすすみ出て挨拶した。する「ああ、そうか、あんたが一万田さんか。あんたはご苦労なこつちやナ。毎日ぎょうさんのお札勘定して、「苦労なこつちやな」

羽織袴に威儀を正していた一万田さんは、それを聞くとハアツと言ったとき二の句がつけなかった。もちろん、老師とて日銀総裁が自ら二勳定をしたりせぬことは百も承知である。それを、こういうふうにはパツと表現されるところに、並ならぬ人間が感じられたのだらう。しかし、一時間か二時間たつと、老師はパツと湯飲みを伏せる。

「わしはもつ、これでやめや。あとは皆さんでやって下さい」そういつて、スツと寝床に消える。私は酒飲みでないが、これはなかでできることではないと思うと、

老師を訪ねると大喜びの酒飲み相手となつた当時大阪朝日編集局長だつた進藤次郎氏が書かれている。

**田中清玄氏の回想から**

私が料理が好きで次のような文章に眼をやつた。

「全く荒れるに任せた破れ寺、白隠禪師の菩提である三島市の竜沢寺で老師は鉢と座禅の修行をしていた。そこに十一年と十ヶ月の刑期をおえて小菅刑務所を出所すると、翌々日の五月一日、玄峰老師に相見して教えを懇願した。それまで生命を賭けてやってきた共産主義が誤謬(ごびょう)：あやまり)であるとの考えに達していたが、さて、それに代わる自分の道は何かということ、全く行き詰まっていた。老師は快く、私を受け入れられ、その年の六月から私は、雲水(雲がどことさだめなく行き水が流れてやまないように)諸国を修行して歩く僧。同様の修行を竜沢寺出始めた。・・・」

「入山するとすぐ私は典坐(てんざ)といつて飯炊きをやらされた。竜沢寺の起床は三時、すぐ読経が始まり、粥坐(しゆくざ)：朝食(しゆくざ)が四時である。生まれて初めて炊く飯だからお焦げや生煮えばかりだつた。

「あんたは殺生しとるな」

炊事場にまわつて来ると老師は言われるが、鳥や魚を料理しているわけではないから、何のこともか、サツパリわからぬ。三ヶ月経つてやつと、まともな飯が炊けるようになったある日、

「あんたも、やつと殺生せんようになつた」

と言われる。なるほど、ものの味を生かすのが料理で、それを生かさぬのが殺生か。そうすると、物の価値を生かすのは経済で、物と人を生かすのが政治かと、愚昧(ぐまい)：ばか)で、物の道理がわからないこと。な私にもわかる。

老師の言葉は常に人を見ての言葉だつた。一つのことには囚われないから、こちらが同じことを言つて褒められる時もある。これら叱られる時もある。

これも私の未熟さを語ることになるが、竜沢寺へ入つて一週間ほど経つた夜、何のために竜沢寺へ入山したのかと老師に問われて、私は得々として、言下に答えた。

「世のため、人のためにと念願して修行したいからです」

その時は、「ああ、奇特なことじゃ」と誉められたが、それから三ヶ月経つてのことだ。同じことを老師に問われて、私と同じことを答えると、いきなり頭ごなしに怒鳴りつけられた。

「お前は、まだ解らぬのか！。わしは、世のため、人のためにと念じて修行したこととは一度もない。みんな自分のためにやっているのや」捨て台詞のように言つて、老師は隠察(いんさつ)に入つてしまわれた。

最近料理もテレビ番組で言葉や姿や形で真似られるが料理人の心を知るには繰り返し繰り返し鍛錬が必要だ。

終わり

**弘法大師の言葉**

ひるまずただすべし

昔も今も、清廉潔白な人が家を富まし

直言して主をいましめる人が

身を榮やしたためしはない

けれども、義を守る者は

正しからざるものを受けず

道に順う者は

ひるむことなく直言するのみである。

訳文：前後二通の手紙を拝見して、事情がよくわかりました。事のなりゆきに驚き、憂慮しています。昔をかえりみても、今の世を見渡してみても、未(いま)だかつて精錬潔白の身で財をなしたものはなく、是非善悪を忌憚(きたん)なく忠告して主君を諫めた人で、身の榮達をとりあげたものもいません。しかし、それでもなお、正義を守ろうとするものは、邪(よこし)まな金品を受けず、道を重んじてこれに順(したが)うものは、正しく諫めるほかはないのです。真に主君のことを思つて諫めた結果、わが身の榮達を失うことと、面前で媚びへつらつて身のためをはかることと、一体この二つは、いずれを捨て、いずれを取るべきでありましょうか。取捨の選択は、人それぞれの考えによつて違ひましよう。たとえ血をかけた肉親とて、諫言した親子兄弟をも抹殺し、その一族を滅ぼしてしまうこともあるのです。ましてや血のつながりのないものに対しては、なおさらのことでありましょう。忌憚のない諫言の意義は、その悪行を改めさせて善行に向かわせることにあります。かくてまた、菩薩の心すべきことは、衆生と苦楽をともしして、これを 次ページへ

**LEC** レック  
**ミヤタケ**  
LIFE of ELECTRIC COMMUNICATION

有限会社 **ミヤタケ**

代表取締役 **宮下隆博**

〒640-8329  
和歌山市田中町4-119  
TEL(073)422-2327 FAX(073)436-5598

**JAPAN MEDITECS** 人に優しい音声発生装置！

有限会社 **日本メディテックス**

代表取締役 **山口昭昌**

〒641-0054  
和歌山市塩屋5丁目5番43号  
TEL(073)446-2009 FAX(073)446-3696



導き救うことにあり、それこそが最も大切なことなのです。聖人の所行も、自らの才智をかくして万人を救うものでなければなりません。しばらくは才智を包んで顕わさず、世俗に仲間入りして異を立てず、塵多き濁った水では足をこそ洗うにこしたことはありません。いわゆる和光同塵が必要なのです。しかし、たとえ諫めても、その悪事を少しも改めず、諫言に立腹して、かえって敵意をいだくようならば、かれも己もともに益なく、現在と将来にわたって損失あるのみです。もしも、翼をふるって高く飛び、鱗(うろこ)をふるって遠くへ去るほかありません。しかし、もしもあなたが官衣をきつぱりと脱ぎ棄てて隠退し、官吏の職を投げうって心やすんずることできないとすれば、病気にことよせて、地方官として都を立ち去るほかありません。いずれれを取りいずれを捨てるべきか、いずれから去りいずれに就くべきか、道は二つに一つでありましよう。よくよく熟考の上、行動されましよう。

高野維筆集「詩文篇二」(弘法大師 空海全集第七巻 121頁 筑摩書房発行)

弘法大師の手紙を集めた「高野維筆集」には知人からの手紙に親切に返事を出しておられる弘法大師の優しい思いやりがみられます。これも、弘法大師の手紙の一部分ですが誰あてのものであるかは解っていません。中央政府の高位の官吏をしている上役の誤った行いに、どうしてよいか迷っている人であると推定されまう。誤ったおこないがあることは、どういふことが書かれていないのではつきりしないが、おそらく地位を利用して私欲の限りをつくしていることではあるまいか。とかく不正な行いであることは、はっきりしています。だから不正をただすために上役に直言しなければならぬことは解っています。しかし、上役に直言しても反省して不正をただすということはまず考えられないことであり、返ってにくまれ、なにかにつけていじめられかも知れない。自分は良くとも家族のこともあり、迷わざる

をえないのでありましよう。そのことを弘法大師、この一文の後で、正しく問題の本質を指摘されています。一千年前も、現在も全く変わっていない問題です。弘法大師はこの世では不正が正よりも強く善よりも悪がみなぎっていることを、よく知っています。

昨今の、宗教団体あるいは宗教家の(その団体・個人は偽物)とんでもない悪事、公務員の許されない悪事、企業ぐるみの総会屋との悪事、金融機関幹部の公金着服、医療機関のエイズ問題に見られる悪事、選挙に関わる不正な問題、企業経営に関わる経営理念を問われる諸問題、青年男女の教育に関わる悪事等々、数え上げればキリがない。ですから、当時、心ある役人の弘法大師への手紙での質問の素晴らしさに感動さえおぼえます。その質問に答える弘法大師がどう答えたらいのかと苦しんでおられます。

そこで、昔も今も清潔潔白な人が、家を富ますことはなかつたし、直言すれば出世することも不可能になります。それでも覚悟を決め善や善のために進むのが、人のため世のためであると励ましておられます。

従って、正義のために勇氣ある善良な人々の「悪事の犠牲者」多いことを自覚しなければならぬ。

弘法大師は「役人を辞めるか、左遷かを覚悟しなければならぬでしょう」とも述べています。「そのために生活も貧しくなり、身分も低くなり、家族や、そのまわりからの批判にもたえていかねばならぬでしょう。それでも、正義と善に生きられるかどうか、それは大変なことでありまう。今の世の中でも、実に多くあります。それで、そのことへの疑問や迷いすら持ちこたえなくなるほど麻痺してしまっているほどです。

人間に潜む悪の本質を考えるに、我々日本人に最も大切な「お米」とか「お金」について考えましよう。どちらか一般に顔がありません。同じ一万円でも悪事で得た一万円か

善良な商行為で得た一万円か判断出来ません。それでも、昔からお金を大切なものであると家庭で教育されてきています。それと同じようにお米も、例えば新潟の魚沼のコシヒカリと秋田小町とをブレンドして、新潟の魚沼のコシヒカリですとすすめられても二セモノであることを誰も解りません。

人間にとつて最も大切なものに、実は悪が潜んでおります。しかし、決してお米やお金それ自体に悪が潜んでいるではありません。人間の現象の心に、善なる心と悪なる心」が存在すると云うことです。

今一度、このことの意味を考え直し、身近から不利を覚悟して勇氣を出し、直言していくべきなのではないでしょうか。

### 仏教小話

#### 夢ものがたり

昔、房州の高瀬(たかだき)というところの地頭がある時自分の一人娘を連れてはるばる熊野権現に参詣した。娘は極めて美しく現今の八頭身というような典型的美人であった。熊野の房に仕えていた月久という若い僧がこの娘を見初め恋心を燃やしたが、思いも遂げぬうちに娘は父と共に房州に帰ってしまった。さて月久は悶々(もんもん)と月日を暮らすことになったが、考えてみれば、自分は仏道修行の志をたてて熊野の霊社に仕える身である。どんな前世の宿行(しゅくご)にかしらないが、一人の女のために、清浄の靈社を汚し、修行に怠りの心が生ずるはまことに情けないことである。どうかしてこの悪縁を絶ち、妄念を抑えなければならぬと心をこめて祈願したが、何としても煩惱の念はやまず、日に増し彼女の面影が忘れられないまゝふらふらと熊野をさまよいでて房州の方へ憧れた。

さて、日を重ねて相模の国に辿りつき、六浦(ろくつら)というところで便船を待つうち、旅の疲れで砂上に転び寝をした。夢に便船が来て房州にわたり高瀬を尋ねて行く土地頭はどうして来たのかと問うた。

「鎌倉に修行に来ましたが、お宅が近いと聞いて懐かしく訪ねて来ました。」

主は喜んで様々にもてなし、田舎の暮らしも面白いと遊んでゆきなさいと云われ、一日二日と暮らすうち、遂に娘との思いを達し、二人の仲は細やかに、一人の男子を儲けたのである。父母はこれを知って大いに怒り勘当したので、娘は知人を探ねて身をかくし年月を送るうち、一人娘のこと、いい、この僧の年も若く、才智あり、なにかと人並み優れたものであったので改めて養子にしようとして代官に届け、入り婿の式も盛んにした。さて僧は還俗してこの家の養子になり、父の職をつぎ年月を重ねて子供三人生まれた。最初の男の子が十三となったので元服させ鎌倉へ出し修行させようと、家族打連れて海を渡るうち、俄(にわか)に強風起こり、その時舷(ふなばた)で遊んでいた彼の長子が過って海中におちた。あれよあれよと騒いでいるうち、ふつとこの長々しい夢を覚めたのである。

僧は砂上に起き上がり、夢の中の十三年の間のことをつくつくと思い浮かべ、これは片時の夢であった。たとえ本意を遂げられぬ栄えあるうともこれもたたくの夢である。いつの世も喜びも悲しみもあるうと、急に踵(きびす)・あと(もどり)をかえし熊野に帰り、それより余念無く行いを澄ましたという。

浦島太郎の童話にも似ています。私たちの時間は時計の時間(客観的時間)です。充実した仕事を8時からしている時、お昼ですよ」と声をかけられ非常に短く感じる時(主観的時間)があります。仏教では主観的時間を最も大切な時間とします。

弘法大師から学ぶ祈り

谷口雅春著「碧眼録解釈」に尊師が毎日の行の中に毎朝「甘露の法雨」の読経と真理の吟唱から一章節拝読をなさったことが記されています。

祈りの根源はこのように来る日も来る日も真理のお言葉のお経を唱えるところに見えない実在が充滿されているのです。

その実在の相が形となって顕れたのが祈りであり、小生が僧である真言宗の祈りの根源を弘法大師空海の書簡から観ることができるとは、真言密教の祈りの根源…

昔、祈祷宗教の意味するところ、即ち本実在の真相(真の相)を観る事の出来ない人達によって風潮され、安易な祈り(祈祷)があった。弘法大師空海が没して一千年後の今日、空海の数々の書簡の中に「真言密教の祈りの根源」を観ることができません。

実は五官に映するものはほんのもののこの表面で、肉眼で見えない所こそ、何ものか一杯に満ちているのです。その方こそ実在で、肉眼で見える色や形はその実在の上の現象にしかすぎないのです。恰も水が無数の波となって見えても水が本体であるように、眼に見えない実在が底にあって、そこから現象を生じている。神秘の実在が、すべての現象の根源をなしているのです。

私は「真言密教の祈りの根源」を次ぎの弘法大師空海の大慈大悲の書簡から読み取る事が出来るのです。『弘法大師空海全集第七巻』高野山雑筆集二十六頁。

沙門空海申上げます。聖帝(みかど・嵯峨)の病氣の事を承り、茫然自失して驚憂いたしております。早速、弟子の僧らとともに、儀軌のつとり、七日七夜を一期として、今月八日から今朝に至るまで患災の法を修し、いままさに終わらんとしています。その間、読経の声は絶えることなく護摩の火煙も昼夜をわかつたず立ち登り

つづけました。かくて神仏の加護を仰ぎ、聖体の平癒を祈願致しました。しかし、その祈りが神仏に通じてご回復のきざしがみえたとも承らず、自らの丹誠の足らざるためかと、おのが肝のただれるほどに、苦惱憂慮いたしております。なにとぞ、この意中をご推察たまわりますように。謹んで、加持せる神水一瓶を、取り急ぎ弟子の沙弥真朗にもたせて何かせました。どうかお薬にそえて服用せられ、病いをのぞかれますように。沙門空海、まことにおそれ多くも、謹んで申上げます。

弘仁七年(八一六)十月十四日 沙門空海 上表

私たちの祈り(現象)の根源(真相)は己心に満ち溢れた大悲大慈(真相)から顕れた祈りであることを懇願するものであります。 合掌

人間の限らない誓(おん)りは 地球をも滅ぼす

我が国の宇宙飛行士毛利衛さんが乗り込めばスペースシャトル「エンタープライズ」が日本時間2月1日(小生の誕生日)に打ち上げ秒読みに入りました。大空に輝く無数の星の群れ、強く放つ光の有名な星月、太陽、そして淡く青く光る一段と輝く我が地球、また、微かな光を点滅させながらひっそりただす小さな星、何千光年もかけて地球にやって来て私たちの目に映る素晴らしい輝きの星の数々。毛利さんは大日如来の宇宙から眺める地球、そこに実在する生きとし生けるモノ。その中の人間が共生する偉大な働きと重入を再認識されるでしょう。

大日如来の宇宙が眼に見えない時間と空間を越えてつながっている。

「人間神の子」を越え、一切の生きとし生けるのは「神の子・仏の子」である、生きとし生けるモノに神性、仏性が宿っているのです。

宇宙は不二即ち一つなのです。「実相現象渾然一体」を乗り越え「諸法実相」なのです。「諸行無常」とは生かされている事の神や仏の証なのです。人間の幸せは、経済的豊かであるといふ宗教は「淡青く光る一段と輝く我が地球」を滅亡に追いやるかも知れない事を知るは大悟であること。

岩屋山 福勝寺、所蔵品が公開展示される

「加茂谷の歴史と文化と生活」を探る

- 一、加茂谷のはじまり
二、加茂谷と加茂氏
三、福勝寺と蓮如
四、加茂谷とみかん場所

下津町立歴史民族資料館

下津町上六八六 長保寺境内 電話四九二一四八二六 期間：平成十二年九月末日迄



歴史民族館

福勝寺・恒例の初午祭

三月十三日 祈願祈祷：午後一時より 大餅投げ：午後三時より

碩峯の写経・法話

四月度 一、写経会 四月八日 午前十時～十二時 (会費・千円) 二、法話会 四月八日 午後二時～午後四時

編集後記

約十年前可愛い小学四年生の少女が行方不明になって十九歳になるまで狭い部屋に監禁され先月幸いにも無事保護される。ご本人は勿論ご両親の喜びは想像を絶するものがあったと思いますが、けれども人の人生に最も大切な長くて短い時期を奪つ死より酷い報いに対し、ご本人やご両親に私たちが何を差し伸べて上げればよいのでしょうか。

最近の事件や悪の事象が過去に無い要因によって引き起こされる。何が原因で悪を誘い、根本的な解決策は一体どこにあるのだろうか。

民主主義の名の下にアダム・スミスの「自分だけの利益を求め自由勝手に競争すれば、一番社会全体の効率を上げ、社会全体が最大の富を生む」への信仰。しかしアダム・スミスは非常に重要なことを言っている事を忘れてはいないだろうか。自分勝手に競争する時でも、もう一人の自分(良心)がいることを意識すること。自由主義の名の下に男女平等による女性の社会参加による子供の家庭教育問題の欠如。日本の親、子供の両方の精神性の乏しさ、唯物、物質主義に走りすぎ、家庭でも学校でも、社会も情操教育の愚かさか原因と思われる。いただきます、という言葉は、あなたの尊い命をいただきます」と動植物に捧げる感謝の言葉、生かし合ふ心の言葉。少欲知足合掌